

大学生におけるデート DV の実態の把握 —被害者の対処および別れない理由の検討—

筑波大学人間系 寺島 瞳

玉川大学文学部 宇井美代子

香川大学教育学部 宮前 淳子

富山大学保健管理センター 竹澤みどり

岡山大学学生支援センター 松井めぐみ

Investigating the state of dating violence within university students: A study of victim coping and reasons for not leaving partners

Hitomi Terashima (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Miyoko Ui (*College of Humanities, Tamagawa University, Machida 194-8610, Japan*)

Junko Miyamae (*Faculty of Education, Kagawa University, Takamatsu 760-8522, Japan*)

Midori Takezawa (*Center for Health Care and Human Sciences, University of Toyama, Toyama 930-8555, Japan*)

Megumi Matsui (*Student Support Center, Okayama University, Okayama 700-8530, Japan*)

This study aims to investigate the state of dating violence within university students through free and detailed descriptions. A second purpose is to examine how victims cope after violent episodes, while a third purpose is to identify the reasons why victims do not leave their partners after such experiences. One-hundred-and-fifty-eight undergraduate and nursing school students completed the survey questionnaire. The results indicate that 46.2% of the participants have suffered some form of unpleasant behavior from their partners, including, for example, being demeaned, cheated on, ignored or neglected, and sexual demands. The results indicate that some victims are able to engage in positive coping strategies, such as discussing the issues with their partners, but many victims merely yield to their partners and do nothing to cope. Out of 73 participants, 35 who had been victimized did not leave their partners, with cited reasons including "because it didn't matter much", "because it's my fault", "because they love their partners", and "because it's difficult to break up". This study shows that while many students suffer from dating violence, many are unable to adopt a positive coping strategy and are unable to leave the partner for various reasons. The situation clearly warrants further investigation with more students in the future.

Key words: Dating violence, victim coping, reasons for not leaving partner

問題と目的

デートDVの認知度

夫婦間など親密な関係で起きる暴力であるドメスティック・バイオレンス（DV）が、大学生などの若いカップル間でも起きており、デートDVとよばれて注目されている。内閣府（2012）の調査によると、10歳代から20歳代の頃に、女性の13.7%、男性の5.8%が交際相手から「身体的暴行」「心理的攻撃」「性的強要」のいずれかをされた経験がある。このような現状も踏まえて、内閣府主導で若年層を対象とした女性に対する予防啓発を目的とした調査研究や研修などが、近年積極的に行われている。たとえば、内閣府が地方公共団体に調査を委嘱して行った実態調査がいくつか報告されている。

内閣府が地方公共団体に調査を委嘱して行った実態調査としては、横浜市による高校生および大学生を対象としたデートDVに関する調査がある（横浜市、2008）。この調査によれば、対象者の大学生310名のうち、ドメスティック・バイオレンス（DV）という言葉を知っている大学生は93.9%であるのに対し、デートDVという言葉になると33.9%と割合がかなり減っていた。また、デートDVの被害経験率は、大学生では女性の34.8%、男性の22.7%と高い割合であった。この被害には「デートの費用やお金を無理やり出させる」「メールのチェックや友達付き合いの制限」なども含まれる。そして、これらの項目が暴力だと認識していなかったと回答した大学生が女性31.3%、男性48.4%となっており、精神的暴力を暴力とみなしていない傾向がうかがえる。横浜市と同様の調査が、山形県（2011）や瀬戸市（2010）などでも行われているが、同様にデートDVという言葉の認知度は30~40%と半数以下である一方で、デートDVにあたる被害を受けた経験のある者の割合は総じて高い。精神的・社会的暴力は暴力としての認識が低い傾向も同様であった（山形県、2011）。特に精神的暴力に関しては、実際に被害を受けているにもかかわらず、それをデートDVであると認識していない傾向が総じて明らかである。

なお、アメリカでの調査でも似たような結果が得られている。Miller（2011）は、1,530名の大学生対象の調査で、そのうちの4分の1がこれまで恋愛関係で少なくとも2回以上、何らかの身体的暴力を受けたもしくは振った経験があるにもかかわらず、そのうちの約85%は自分が身体的暴力の被害者もしくは加害者であるという認識がないことを示した。この結果について、Miller（2011）は、多くの大学

生が多少の暴力は恋愛関係の中ではよくあることで、行き過ぎない限りは耐えるべきとしているのではないかと考察している。つまり、デートDVという言葉が認知されていないように、身体的暴力ですら恋人同士で行われると、それが加害・もしくは被害であるとは認知されないことが示されている。

以上より、現代の大学生においてデートDVと考えられるような被害は数多く起きているにもかかわらず、本人たちにそれらが暴力であるという認識はあまりないというギャップがあることが明らかである。多くの大学生が被害にあっている現状を考えると、より詳細な実態の把握が必要であると考えられる。しかし、これらの大学生を対象とした実態調査は、そのほとんどがデートDVと考えられる具体的な項目を提示してその有無を問う方法で行われている。そのため、デートDVに当たる実際に行われている行為が網羅されているとは言い難い。これまで使われている項目を用いて調査を行えば、それ以外のデートDV行為が把握できない可能性もある。また、デートDVに関する認知度の低さを考慮すると、本人はデートDVとは認識していないが、デートDVにあたる行為も見逃されることも考えられる。Cornelius & Resseguie（2007）によれば、妥当性が確認された青年対象の加害行動を測定する尺度はこれまでにない。どこまでを暴力とするかの定義は非常に難しいため、項目を提示する形ではなく自由記述などを用いてより包括的に被害を把握する必要があるものと考えられる。

被害者の対処

暴力は一度きりで終わるものではなく、継続する関係性の中で繰り返される。どの程度暴力が発生しているかという一時点的な実態把握も重要であるが、暴力が起きた時にどのように対処したかという「暴力後の行動について」も検討が必要であろう。暴力への対処はその後の暴力の予測因子にもなるため、対処の仕方によってその後の暴力を予防できるものと考えられる。日本においては、前述の横浜市（2008）の調査で、被害後の対処について複数回答可能な選択肢でその内容をたずねている。その結果、大学生においては、相手に嫌だと言った（51.0%）が最も多く、何もしていない（27.6%）、別れた（25.5%）、相談した（21.4%）であった。何もしていないと回答したものが全体の4分の1を占めており、暴力を受けても積極的な対応が取れない実態を表している。また、国外の研究では、1,112名の大学生を対象に調査を行った結果、暴力の解決には他者が必要と考える人ほど、暴力に対して積極的な対

処をとることが明らかとなった (Bapat & Tracey, 2012)。つまり、自分で解決できると考えれば、積極的な対処はとらないとも考えられる。暴力のあとにどのように対処したかはその後の暴力を防ぐためには非常に重要であると考えられるため、より詳細な検討が必要である。しかし、暴力の要因に関する研究は見られても、暴力の対処に関する研究は国内外でもあまり見られない。横浜市での調査で対処を「何もしていない」と答えた大学生が4分の1以上いたことを考えれば、なぜ積極的な対処をとれないのかについて検討する必要があるものと考えられる。

さらに、デートDVにおいて重大な問題は被害者が加害者と別れられないことにあるが、その理由については明らかになっていない (富安・鈴木, 2008)。横浜市の調査では25.5%は別れたと回答しているが、4分の3は暴力があっても別れてはいない実態が明らかである。加害者と離れない限りは、さらなる暴力につながる可能性も否定できない。なぜ、暴力があるにもかかわらず別れないのか、その要因について検討することも重要であろう。夫婦関係でのDVにおいて被害者が相手と別れない理由は、金銭的な問題や子供の存在など様々なことが存在する。デートDVでは夫婦間のような現実的な問題が存在しない。McKibbin, Goetz, Shackelford, Schipper, Starratt, & Williams (2007) は、カップル間の暴力について、精神的な暴力により、自分を好きになる人はほかにいないと思わされることで、相手から離れにくくなる」と指摘している。デートDVにおいては、このような心理的な要因が相手と別れられないことに関連していると考えられるが、これまで明らかにはされていない。

本研究の目的

以上を踏まえ、本研究では以下の3点を目的とする。

本研究では、大学生の恋人間の暴力について、網羅的に把握できるように「精神的・身体的・性的に、傷ついた・見下された・怖い・嫌だと感じた恋人の行為」と定義し、定義にあてはまる行動について自由記述調査を行うことで、暴力の内容を網羅的に把握することを第一の目的とする。次に、嫌な行為をされた後に実際にどのような対処を行っているのかについてもたずね、どのような行為に対してどの対処が行われる傾向があるのか、その関連について具体的に探る。第三に、嫌な行為をされても別れないという選択をなぜとるのかについて明らかにするため、されて嫌な行為のうちどのような行為が別れない

い選択に影響しているのかについて検討する。また、加害者がその行為をなぜ行なったかについての推測についてもたずねて、これらの要因が別れないという選択にどのように関連しているのかについてもあわせて検討する。

方 法

分析対象者

大学生・看護専門学生158名 (男性29名・女性124名・不明5名)。平均年齢19.8歳 (SD=1.04)。

調査方法

香川県、徳島県、大阪府、愛知県、茨城県、群馬県、北海道の7大学の学生835名に対して質問紙調査を実施した。調査用紙は授業時間に配布して、持ち帰りでの回答を求めた。個人情報を守るため、無記名での協力を明記するとともに、学生1名に対して1枚の返信用封筒を配布し、各自厳封の上、直接返送してもらった。その結果、158名から回答が得られた (回収率18.9%)。なお、本研究は筑波大学人間系研究倫理委員会にて承認を受けた。

質問内容

基本情報 性別、家族との同居の有無、これまでに恋人がいた経験の有無、これまで交際した人数、交際した中で最も長かった交際期間をたずねた。

恋人からされた行為 「これまで、恋人の行為によって、精神的・身体的・性的に、傷ついた・見下された・怖い・嫌だ、などと感じたことはありますか? もしあれば、どのような行為をされたのかを具体的に書いてください。」という質問により自由記述形式で回答を求めた。

恋人からされた行為に関する理由の推測 「恋人は、なぜ、質問X¹⁾(恋人からされた行為)のような行為をあなたに対して行ったと思いますか? 以下に、考えられる理由をできるだけ具体的に書いてください」という質問により自由記述形式で回答を求めた (以下、「行為理由の推測」)。

恋人からされた行為への対処 「その時、あなたはどのような対処を行いましたか?」という質問により自由記述形式で回答を求めた (以下、「対処」)。

別れの有無 「質問X (恋人からされた行為)のような行為をきっかけにその恋人と別れましたか?」という質問により、「はい」か「いいえ」で回答を求めた。

1) 実際は質問項目の番号を提示した。

別れなかった理由 別れの有無で「いいえ」と回答した対象者にのみ「その恋人と付き合いを続けた理由はなんですか?」という質問により別れなかった理由についてたずねた。

結 果

分析対象者の属性に関する分析

全分析対象者の51.9% (男性22名・女性58名) が一人暮らしであり, 77.2% (男性21名・女性97名) がこれまでに恋人がいた経験があった。平均交際人数2.68人 ($SD=2.01$)。交際した中で最も長かった交際期間の平均は16.75か月 ($SD=16.27$) であった。

恋人からされた行為の分析

158名中73名 (46.2%) (男性8名・女性62名・不明3名) が「恋人にされた行為」について記述していた。このうち, 52.1% が一人暮らしであり, これまでの交際相手の人数は平均3.0人であった。また, 46.6% がこのような行為をされたのちその相手との関係を解消していた。

全記述数は140であった。それらを著者4名によってKJ法を用いてカテゴリー化した。その後, もう1名の著者と心理学を専攻する院生3名によってカテゴリー化の妥当性が確認された。以下, すべての自由記述において同様の手続きによりKJ法が行われた。KJ法の結果, 17カテゴリーが抽出された (Table 1)。「見下し」は人格の否定, 説教, コンプレックスについての指摘などの見下したような言動, 「浮気」は自分以外の人も付き合いなどの行為, 「嫉妬・束縛」は極度の嫉妬や頻繁なメール, 電話による行動の詮索といった行為, 「ないがしろ・放置」は冷たい態度や急に連絡が取れなくなるなどの自分をないがしろにするような相手の行為, 「性的行為の要求」は望まない身体接触や性行為, 体だけの関係を求める言動, 「第三者への気のある素振り」は自分以外の人を良く言ったり, 仲良くしたりといった行為, 「約束の反故」は約束を破るなどの行為, 「怒りをぶつける」は怒鳴ったり, 八つ当たりをしたりといった行為, 「趣味・主張の押し付け」は自身の趣味・好みや意見を押し付けてくるような言動, 「コントロール」は行動や意思決定について指図したり, 自傷行為によってコントロールするような言動, 「関係解消」は別れをほのめかす, または求めるような言動, 「身体的暴力」は物を壊すことも含めた暴力行為, 「性的行為の強制」は拒否しているにもかかわらず性行為を無理強いしたり, 避妊をしないなどの行為, 「信頼関係の破綻」

は嘘をつく, 隠し事をする, 自分のことを信用しないなどの行為, 「性格への嫌悪」は外見へこだわる, 土壇場で逃げ腰など相手の性格的特徴を表すような行為, 「第三者への迷惑行為」は自分以外の他者や友人に対して迷惑となる行為であった。

対処の分類

158名中69名 (43.4%) (男性7名・女性61名・不明1名) が自分の行った「対処」について記述していた。全記述数は134であった。KJ法の結果, 13カテゴリーが抽出された (Table 2)。「話し合う」は相手の考えや理由を訊いたり, 自分の思いを訴える対処, 「何もできない・しない」は何も言えなかったりただ泣くだけの対処, 「関係回避・解消」は連絡をとらないようにしたり, 別れてしまう対処, 「従う」は我慢したり言うことを聞いたり, 自分の気持ちを抑える対処, 「説得する」は事実を指摘したり, 約束を決めたり, 納得をしてもらおう対処, 「受け流す」は笑って流したり放っておく対処, 「謝る」はとりあえず謝るや, 怖くて謝る対処, 「怒る」は相手に怒りをぶつける対処, 「反撃する」は言い返したりやり返す対処, 「第三者と相談」は友達や家族に相談したり話を聞いてもらう対処, 「拒否する」は相手の要求を断ったり抵抗したりする対処, 「発散する」は思いっきり泣いたり気持ちを発散させる対処であった。

Table 1
恋人からされた行為のカテゴリー

カテゴリー名	記述数
見下し	14 (10%)
浮気	14 (10%)
嫉妬・束縛	14 (10%)
ないがしろ・放置	12 (9%)
性的行為の要求	11 (8%)
第三者への気のある素振り	10 (7%)
約束の反故	8 (6%)
怒りをぶつける	7 (5%)
趣味・主張の押し付け	7 (5%)
コントロール	7 (5%)
関係解消	7 (6%)
身体的暴力	6 (4%)
性的行為の強制	5 (4%)
信頼関係の破綻	5 (4%)
性格への嫌悪	5 (4%)
第三者への迷惑行為	4 (3%)
その他	4 (3%)
	140

恋人にされた行為とその対処との関連

恋人にされた行為と、それに対して行われている対処との関連性を把握するために、恋人にされた行為を行、対処を列とした頻度のクロス表に対して数量化理論第Ⅲ類（双対尺度法）を行った。相関比の2乗はそれぞれ、第1軸が.27、第2軸が.20であった。分析結果をFigure 1に示す。第1象限には「性的行為の要求」と「拒否する」「発散する」「関係回避・解消」の対処が布置され、第2象限には「浮気」「見下し」「コントロール」「身体的暴力」「趣味・主

張の押しつけ」「第三者への気のある素振り」「第三者への迷惑行為」と、対処として「説得する」「受け流す」「第三者と話す」が布置され、第3象限には「関係解消」「約束の反故」「性格への嫌悪」「ないがしろ・放置」と、対処として「話し合う」「従う」「謝る」が布置され、第4象限には「性的行為の強制」「怒りをぶつける」「信頼関係の破綻」「嫉妬・束縛」と、対処として「何もしない・できない」「怒る」「反撃する」が布置されていた。

Table 2
対処のカテゴリー

カテゴリー名	記述数
話し合う	21 (16%)
何もできない・しない	19 (14%)
関係回避・解消	16 (12%)
従う	12 (9%)
説得する	12 (9%)
受け流す	10 (7%)
謝る	8 (6%)
怒る	7 (5%)
反撃する	7 (5%)
第三者と相談	6 (4%)
拒否する	6 (4%)
発散する	5 (4%)
その他	5 (4%)
	134

行為理由の推測の分類

158名中68名（43.0%）（男性7名・女性60名・不明1名）が、恋人の行為理由を推測し、記述していた。全記述数は131であった。KJ法の結果、14カテゴリーが抽出された（Table 3）。「自分に非がある」は自分の性格や行動が原因であるため、「相手の勝手な感情から」は相手が相手の思い通りにしようとしたため、「相手の性格」は幼い・自分勝手など相手の性格のため、「相手の自分への気遣い」は自分を気遣ったため、「相手の衝動的行動」は主に性的行為の要求に関して衝動がおさえられなかったため、「他の異性の存在」は浮気などの行為に関して他に興味のある異性がいたため、「自分を好きだから」は相手が自分のことを好きであるため、「自分に飽きたから」は自分への興味を失ったため、「許されると思っているから」は自分が許すと相手が考えているため、「なんとなく」は特に理由はない、「相手のストレス」は相手が何らかのストレスを抱えて

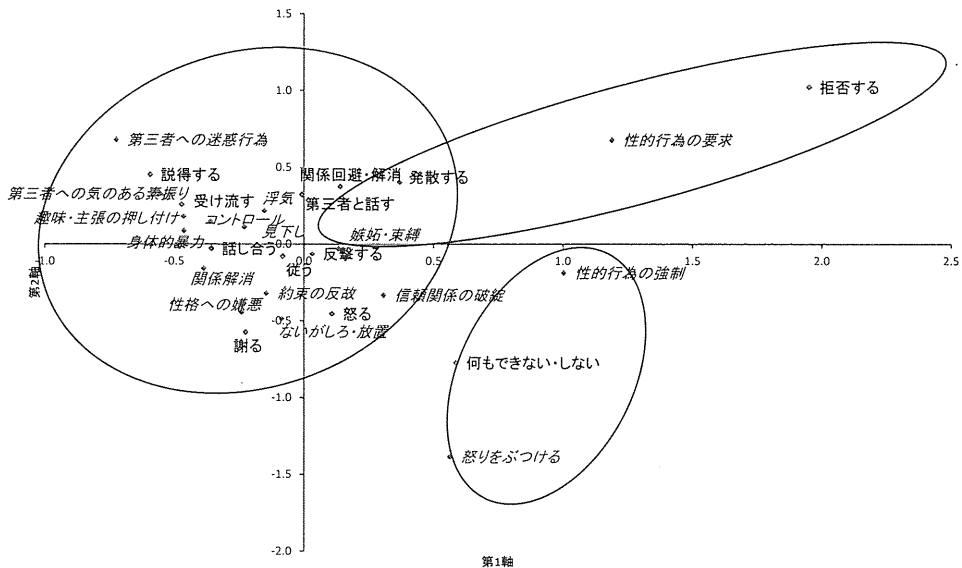


Figure 1. 恋人にされた傷つくような行為とそれへの対処の関連

いたため、「自分に自信があるから」は相手が自分に自信があるため、「物理的疎遠」は遠くにいるためという理由であった。

別れない選択の規定要因および別れない理由

恋人にされた行為を記載していた73名中、34名は「別れた」、35名は「別れなかった」と回答し、4名は未記入であった。「別れた」「別れなかった」を分離する要因を検討するため、「別れたかどうか」を基準変数、「恋人にされた行為」「行為理由の推測」を説明変数とした数量化理論第Ⅱ類による解析を行った。結果を Figure 2 に示す。解析の結果、相関比は .52、的中率は84.1%であった。相手からされた行為のうち「コントロール」「趣味・主張の押しつけ」「第三者への迷惑行為」「第三者への気のある羨望」などは別れない方向へ、「関係解消」「性的行為の要求」などは別れる方向へ影響していた。また、行為理由の推測のうち「相手が許されると思っているから」「なんとなく」は別れない方向へ、「相手に自信があるから」「他の異性の存在」は別れる方向へ影響していた。

158名中35名(22.2%) (男性3名・女性29名・不明3名)が別れなかった理由について記述していた。全記述数は46であった。KJ法の結果、12カテゴリーが抽出された (Table 4)²⁾。被害を「たいしたことではない」もしくは「自分に非がある」として、「好きだから」という相手との現在の関係を重視して別

れない傾向にあった。

考 察

恋人からされた行為

本研究では、デートDVにあたる項目に限定せず、恋人からされた嫌な行為について自由記述形式で回

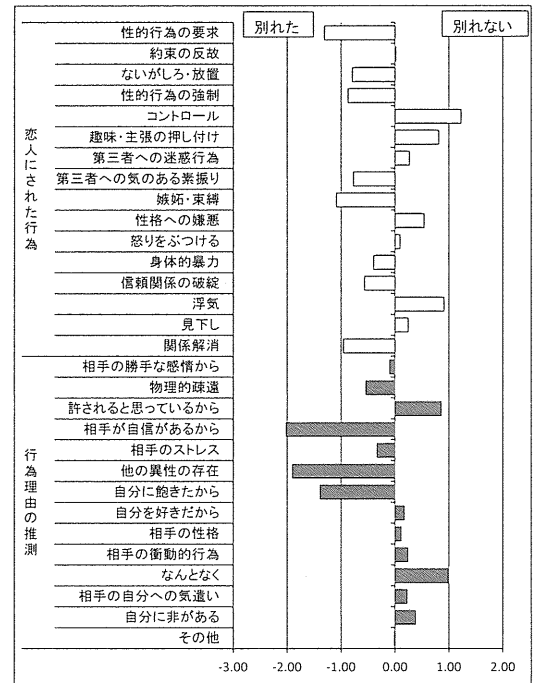


Figure 2. カテゴリー数量グラフ

Table 3
行為理由の推測のカテゴリー

カテゴリー名	記述数
自分に非がある	25 (19%)
相手の勝手な感情から	12 (9%)
相手の性格	12 (9%)
相手の自分への気遣い	10 (8%)
相手の衝動的行為	10 (8%)
他の異性の存在	10 (8%)
自分を好きだから	7 (5%)
自分に飽きたから	7 (5%)
許されると思っているから	5 (4%)
なんとなく	5 (4%)
相手のストレス	5 (4%)
自分に自信があるから	5 (4%)
物理的疎遠	5 (4%)
その他	13 (10%)
131	

Table 4
別れなかった理由のカテゴリー

カテゴリー名	記述数
好きだから	7 (14%)
たいしたことではなかったから	6 (14%)
自分に非がある	6 (14%)
別れる方が負担	5 (10%)
納得できたから	4 (10%)
楽しいことの方が多から	4 (10%)
相手が自分のことを好きなため	3 (7%)
あきらめ	3 (5%)
自分を理解してくれたから	2 (5%)
信じようと思ったから	2 (5%)
相手を支えたいから	2 (5%)
その他	2 (2%)
46	

2) カテゴリーの名称がそのまま内容を示しているため説明は省略した。

答を求めた。その結果、従来行われてきた研究における被害率のパーセンテージよりは多い46.2%が何らかの行為について回答しており、多種多様な行動が把握できた。回答を検討した結果、多くの研究においてみられる身体的暴力、精神的暴力、性的暴力の各カテゴリーにあたる行動が挙げられた。その中でも、精神的暴力にあたるカテゴリーは「見下し」「嫉妬・束縛」「ないがしろ・放置」「怒りをぶつける」「コントロール」「第三者への迷惑行為」など多岐にわたった。これらの行動はこちらが項目を指定したら回答されない内容も含まれていると考えられ、恋人間の暴力を幅広く把握できた。特に、見下しや浮気、嫉妬・束縛、ないがしろ・放置など、精神的暴力が全体の4割近くを占めていた。デートDVの研究は身体的暴力に重点が置かれがちであるが、実際は精神的暴力のほうが内容は複雑で多岐にわたる。本研究では、相手の自尊心を傷つけたり、相手の行動や意思をコントロールするような内容もあり、恋人間暴力の複雑な実態を把握することができた。精神的暴力も身体的、性的暴力と同じくらい重大な結果をもたらすとする研究もあるため(Stets,1991)、精神的暴力に関するより詳細な検討が必要であると考えられる。

被害者の対処

暴力に対する対処についてもたずねたところ、話し合うという積極的な対処の次に「何もできない、しない」という対処が続き、全体の14%を占めていた。この結果は、横浜市(2008)の結果とも一致する。その他、自由記述形式で回答を求めているため、「従う」といった横浜市(2008)の調査にはない対処も全体の9%あった。つまり「何もできない・しない」および「従う」といった消極的な対処だけで全体の4分の1を占めていた。また、行為の内容と対処との関連を検討した結果では、「性的行為の要求」では「拒否する」対処が取れているにもかかわらず、「性的行為の強制」には「何もできない・しない」という対処であった。また「怒りをぶつける」についても「何もしない・できない」という対処になっていた。「身体的暴力」では積極的な対処が取れていることを考慮すると、「暴力」自体よりも「怒りをぶつけられる」ことのほうが精神的に被害者を追い詰めて対処ができなくなる可能性も考えられる。一方で、「嫉妬・束縛」や「見下し」などには「従う」という対処をとることが示唆された。

このことから、大学生は恋人からの性的暴力や精神的暴力に対し、何もできずに従ってしまう場合があると考えられる。被害者がこうした対処方法を選

択するのは、加害者に対して従順であることによって、さらなる暴力から心身を守ろうとするためかもしれない。しかし、消極的な対処は加害者の反省や行動変容にはつながりにくいのではないだろうか。日本DV防止・情報センター(2007)は、加害者は時間がたつにつれてパートナーを支配し、恐怖を与えて服従させると指摘している。暴力の責任を被害者の行動に帰属してはならないが、あくまで暴力が両者の相互作用の中で起きることを考慮すれば、消極的な対処をとり続けることによって、加害者の態度や行動がエスカレートするおそれもあるものと考えられる。

一方で、「話し合う」「関係回避・解消」「説得する」「受け流す」などの積極的な対処も多く見られた。これらの対処は「身体的暴力」「趣味・主張の押しつけ」「浮気」「第三者への気のあるそぶり」「見下し」「コントロール」と関連があった。なぜ「身体的暴力」に積極的な対処がとれたのかについては定かではない。しかし、本研究では身体的暴力が全体の4%しかなく、物を壊すといった内容もこのカテゴリーに含まれているため、それほど深刻な身体的暴力ではなかったことが要因の一つであることも考えられる。また、Foshee, Benefield, Suchindran, Ennett, Bauman, Karriker-Jaffe, McNaughton, & Mathias(2009)は、加害者による身体的暴力として、“叩く、物を投げる”といった中程度のものや“武器を用いて暴行を加える”、“首を絞める”といった重度のものを分類している。暴力の程度によって対処方法が異なることは十分に考えられるため、今後は、各行為の内容についてさらに詳細に検討する必要があると思われる。

別れない理由の検討

相手がなぜそのような行為をしたかについての推測は、「自分に非がある」という記述が最も多かった。嫌なことをされているにも関わらず、自分に原因を帰属する回答者が多かったことは注目に値する。上述のように、嫌なことをされた後に積極的な対処がとれないこととも関連している可能性も考えられる。さらに、別れない理由の検討によって、その背景が推察できる。別れない理由についてもやはり「自分に非があるから」とする回答が多く、また、「たいたしたことはない」と被害を軽視し、「好きだから」「楽しいことが多いから」など相手との現在の関係の方を重視して別れないことが明らかとなった。青年期では暴力を愛と勘違いして別れられないという指摘もあり(伊田, 2007)、この指摘と同様の傾向を反映している可能性もある。また、これら

の回答からは、関係を維持するためには自分さえ我慢すればよいと考えている可能性も推察される。これは配偶者からのDV被害者に共通にみられる考え方でもある(内閣府, 2006)。

一方で、直後の対処では「何もできない・しない」「従う」と関連があった「性的行為の強制」「嫉妬・束縛」などは、最終的には別れる方向へ影響していたことより、直後は何もできなくとも、最終的には関係が解消できていることも明らかとなった。直後は何もできなかったとしても、最終的にどのようにして別れに至ったのかについては本研究からは明らかではないため、今後時系列的な検討も必要であろう。

本研究の限界と今後の課題

本研究にはいくつかの限界がある。最初に、調査対象者のほとんどが女性であったことが挙げられる。内閣府(2012)の調査では、女性よりは数が少ないものの、男性も被害を受けている。特に精神的暴力であれば、男性が女性から被害を受けることも十分に考えられるため、今後は男性に対する調査も必要である。また、本調査では全体的に対象者の数が少なかったため、そのうち被害を受けた人の数はさらに限られてしまった。度数が少ないカテゴリーも多いため、解釈の一般化には慎重になる必要がある。しかし、大学生を対象としたデートDVの調査では、被害率や被害に影響する要因などの研究が多い中で、暴力への対処と別れたかどうかには焦点をあてて検討した本研究の結果は貴重であると考えられる。今後、暴力にどのように対処することがさらなる被害を防ぐことができるのかについて明らかにすることが求められる。

引用文献

- Bapat, M., & Tracey, T. J. (2012). Coping with dating violence as a function of violence frequency and solution attribution: a structural modeling approach. *Violence and Victims, 27*, 329-343.
- Cornelius, T. L., & Resseguie, N. (2007). Primary and secondary prevention programs for dating violence: A review of the literature. *Aggression and Violent Behavior, 12*, 364-375.
- Foshee, V. A., Benefield, T., Suchindran, C., Ennett, S. T., Bauman, K. E., Karriker-Jaffe, K. J., McNaughton Reyes, H. L., & Mathias, J. (2009). The development of four types of adolescent dating abuse and selected demographic correlates. *Journal of Research on Adolescence, 19*, 380-400.
- 伊田広行 (2007). 「デートDV」をシングル単位的恋愛論と結びつけて伝える *SEXUALITY, 32*, 16-21.
- McKibbin, W. F., Goetz, A. T., Shackelford, T. K., Schipper, L., Starratt, V. G., & Williams, S. S. (2007). Why do men insult their intimate partners? *Personality and Individual Differences, 43*, 231-241.
- Miller, L. M. (2011). Physical abuse in a college setting: A Study of perceptions and participation in abusive dating relationships. *Journal of Family Violence, 26*, 71-80.
- 内閣府 (2006). 男女間における暴力に関する調査報告書 内閣府男女共同参画局 平成18年4月 (<http://www.gender.go.jp/e-vaw/chousa/images/pdf/h18report0.pdf>)
- 内閣府 (2012). 男女間における暴力に関する調査<概要版> 内閣府男女共同参画局 平成24年4月 (<http://www.gender.go.jp/e-vaw/chousa/images/pdf/h23danjokan-7.pdf>) (2012年9月21日).
- 名古屋学院大学デートDV研究会・瀬戸市交流活部交流学び課 (2010). 「大学生におけるデートDVの実態と暴力に対する認識調査」調査報告書 瀬戸市 平成22年3月30日 (<http://www.city.seto.aichi.jp/docs/2010111003855/files/DVchousahoukoku.pdf>) (2012年8月22日).
- 日本DV防止・情報センター (2007). デートDVってなに? Q & A 解放出版社
- Stets, J. E. (1991). Cohabiting and marital aggression: The role of social isolation. *Journal of Marriage and the Family, 53*, 669-680.
- 富安俊子・鈴井江三子 (2008). ドメスティック・バイオレンスとデートDVの相違および支援体制の課題 川崎医療福祉学会誌, *18*, 65-74.
- 山形県子育て推進部青少年・男女共同参画課(2012). 平成23年度デートDV実態調査の概要について 山形県 平成24年1月 (http://www.pref.yamagata.jp/ou/kosodatesuishin/010003/danjo/date-da_chosa.html/gaiyo.pdf) (2012年8月22日).
- 横浜市市民活力推進局 (2008). デートDVについての意識・実態調査報告書 横浜市 平成20年3月 (<http://www.city.yokohama.jp/ne/news/press/200804/images/phpSt5pkR.pdf>) (2012年8月22日).

(受稿9月28日: 受理10月30日)